

# 「動画」を活用した保育者の力量形成支援に関する試論的考察

## A Study of the Use of Videos to Support Kindergarten Teachers' Competence Building

阿部 学

ABE Manabu

創造性, 省察, ICT 活用, デジタル教材設計, 早回し料理動画

### 1. はじめに

保育の質の向上が求められる昨今の状況において、保育の実際を担う保育者の力量形成をいかに支援しようかということは、我が国の重要な課題である。

本稿は、若手保育者の力量形成を支援する1つの方法として、「動画」というメディアを活用する可能性についての試論的考察を行うものである。はじめに「動画」というメディアの特徴を確認し、その後にある幼稚園で実践された「動画」教材制作の事例を取り上げ、今後の研究の視座を探っていく。

### 2. 「動画」と学び

YouTubeをはじめとした動画共有サービスが広まり、私たちのメディア環境は大きく変化した。YouTube 副社長ロバート・キンセルら(2018)の記述によれば、「毎月十五億人の人々が YouTube を使って、好きな時間、好きな場所で、好きなデバイス(機器)を通して、史上最大の映像ライブラリーを訪れる」状況が訪れた。

こうした状況の中、インターネット上で公開されている「動画」から積極的に情報を得ようとする動きが、特に若年層においてみられるようになってきている。17歳から19歳を対象に「情報や学びを得るためのツール」を問うた調査(日本財団2020)では、「YouTubeなどの動画投稿サ

イト」を選んだ割合は36.9%となっている。これは「テレビ」(52.7%)、「Twitterなどの短文中心SNS」(43.2%)に次ぐ順位であり、「教科書・参考書」(34.8%)、「本」(33.6%)の上位という結果である。様々なメディアと並んで、「動画」が情報や学びを得るためのツール」として選択されるようになってきている。

この調査で示唆的なのは、「学び」という語が使われている点である。YouTubeの「動画」というと、娯楽性の高いものがほとんどであると思われるかもしれないが、教育を目的として公開される「動画」も多い。キンセルらは、YouTubeには様々な教育系「動画」があることを紹介した上で、「ジャーナリストには、YouTubeは「ネコの動画ばかり」と揶揄されることもあるが、教育的あるいはハウツーものの動画は、動物の動画の五倍もの時間、視聴されている」と述べている。

現在の正確な数値は不明であるが、今や数多くの「動画」がインターネット上に公開されており、各々の関心に応じてそれらの動画を検索・視聴するという学びのあり方が広まっていることがうかがえる。こうした状況について、YouTubeトレンド・カルチャー統括部長ケヴィン・アロッカ(2019)は「YouTubeは新しい知識の習得と同義語になった<sup>[1]</sup>」と言い、キンセルらは「動画版ウィキペディア」の役割もYouTubeが担うようになってきていると言う。

### 3. 「動画」というメディア

「動画」による学びが広まっているとは言いが、そもそも「動画」とはいかなるメディアなのであろうか。動画クリエイターの明石(2018)が「YouTubeは爆発的に成長し、いつの間にかインターネットを経由して観る「映像」は「動画」と呼ぶ世の中になっていった」と言うように、動画共有サービスなどで公開されるビデオ<sup>[2]</sup>を「動画」と呼び、さらに、従来からある映像文法や編集方法によってつくられる映画やテレビ番組などを「映像」と呼び、両者を対置させながら「動画」の独自性を説明しようとする文脈が生まれつつある<sup>[3]</sup>。一般に「動画」には短尺のものが多いとは言われるが、ここではその特徴についてより詳しく確認をしてみたい。

前掲の明石は、「動画」を「動画」たらしめる大きな特徴は「情報の凝縮」にあると言う。すなわち、「従来映像が持っていた時間軸を圧縮して、短い時間の中に多くの情報を詰め込むことで新しい視聴体験を生み出している」ものが「動画」だということである。

「情報の凝縮」を目指した編集方法の例には、YouTuberが用いることの多い「ジャンプカット」という手法がある。「ジャンプカット」とは、喋りの隙間を埋める言語学で言うところの「フィラー」(filler)などをカットする手法のことである。「ジャンプカット」により、制作者が不要だと思う情報や、明示的な情報のない隙間部分は徹底的に削除されることになる。結果として「動画」の尺は「映像」よりも短くなると想定されるが、伝えるべき情報の量は変わらない。単に尺を短くするのではなく、「情報の凝縮」を目指すことが重要だということである。

他にも、明石(2020)は「3S」という言葉で「動画」の特徴を説明している。ここでの「S」とは、スマートフォン(Smartphone)、スピード(Speed)、サイレンス(Silence)の頭文字をとったものである。すなわち、「テレビではなくスマートフォンを対象にしており、デバイスを使うロケーションや

距離感に適したスピードを持った、音声をオフにしたサイレンス状態<sup>[4]</sup>にも対応したもの」が「動画」だということである。

こうした特徴をもつ「動画」が生み出され、支持されるようになったのは、インターネットやスマートフォンの普及により、私たちのコンテンツ消費に関わる生活スタイルが変化したからであろう。基本的に「映像」は、皆で1つのスクリーンの前に集い、開始時刻に合わせて視聴するものであったが、「動画」は各々の手元において、いつでもどこでもすぐに再生可能である。そのため、まとまった視聴時間や特定の視聴場所を確保する必要はない。隙間時間でも視聴可能な尺であり、短尺でも十分に内容を楽しめるよう「情報の凝縮」がなされたものとして、「動画」が好まれるようになったのだろう<sup>[5]</sup>。

以上のとおり、「動画」はメディア環境の変化に応じた新たな方法論によって生まれてきたものであり、旧来的な「映像」とは別物として捉えられうるものであることが確認できた<sup>[6]</sup>。では、私たちは「動画」による教材制作のあり方をどのように探っていけばよいだろうか。

### 4. 「動画」の特徴を生かす

元来、ビデオ等のメディアを用いた学びのあり方は、様々に検討されてきた(山内2010)。「動画」による教材を、そうした文脈に位置づけて検討することも可能であろう。

ただし、特に実際に「動画」教材をつくる時には、前掲したような「動画」の特徴の扱いに留意することがきわめて重要となるだろう。たとえば、ビデオを用いた教材の古典的事例に「ミニ号の航海」があるが、こちらは全13話(各15分)の連続したドラマが中心となったものである<sup>[7]</sup>。本研究の文脈で言えば、よくできた「映像」教材ということになる。ドラマの質の高さやマルチメディアとしての革新性が評価されている(西森2010)ものの、「動画」を制作する際にこの教材とまったく同じ方法論を採用しては、指し

手を誤ることになってしまう。つくりたいものが「動画」なのであれば、壮大なドラマよりも「情報の凝縮」がなされているものが望まれるはずであり、皆で集まったの視聴を想定するものよりも「3S」に対応したものが望まれるはずである。

さて、きわめて大拙ではあるが、「動画」教材制作のための基本的な考え方を確認してきた。以降は、ある「動画」教材制作の事例を取り上げ、そこで生み出される学びのあり方について考えていきたい。学びという営みはいかなる所にも生じうるものであるが、本稿では、保育・幼児教育に関する領域をフレームとし、「動画」を用いた保育者の力量形成支援のあり方を探ることを目的とする。具体的には、A. いかなる「動画」教材がありうるか、その制作方法や具体例はいかなるものか、B. 「動画」は保育者の力量形成支援のあり方に何をもたらすか、という点について記述をしていく。

## 5. 「動画」教材制作の事例

本章では、ある幼稚園（以下、A 幼稚園：仮名）における保育者のための「動画」教材制作の事例を取り上げる。本教材は2018年度に企画・制作されたものであり、実際に「動画」が活用されたのは翌2019年度である。なお、筆者は参与観察者としてA 幼稚園に長年かかわっており、後述のとおり本教材の制作にも積極的に関与している。そのため、記述における主体が曖昧になる部分があることを断っておきたい。

### 5.1. 背景

A 幼稚園は、子どもの自由な遊びを中心とした保育を営む園であるが、課業的な活動も柔軟に取り入れている。自由な遊びと課業的な活動は、双方がかかわり合って子どもの生活を豊かにしていく「螺旋状につながる関係」（新垣2008）にあるとされ、双方とも園の保育実践を構成する重要な要素として位置づけられている。

課業的な活動の例として、様々な絵画技法に

触れる活動がある。A 幼稚園では、毎月、指定の技法を用いた絵画を年中児に制作させている。月に1枚（1技法）程度の絵を制作させ、年度の終わりまでに13枚（13技法）の絵を完成させる。最終的には、それぞれの絵にひと月分の日付がレイアウトされ、翌年度用のカレンダーとしてまとめられる（13枚目は表紙となる）。取り上げる技法は、デカルコマニーやフロッタージュなど、絵画技法としてよく知られているものが多い。

取り上げる技法はよく知られたものではあるものの、特に新任や若手など、初めてこの指導にあたる保育者においては、実際の指導場面において難しさや戸惑いを感じることもありうる<sup>18)</sup>。たとえば、単にその技法を知らないということがありうる。また、技法自体は知っていても、園で慣例的に生み出されている制作方法や、具体的な材料の選択や準備、子どもたちにうまく制作させるための勘所など、細かで具体的な点について不慣れだということがありうる。そもそも保育者として駆け出しの状況で、日々の仕事で手一杯ということもありうるだろう。

こういった課題に直面すると、「自分は子どもたちにうまく絵を描かせることができるのか？」と不安が募り、もっとも大切にしたい子どもとのやりとりよりも、保育者としていかに準備や指導をするかという面に思考の多くの部分を取られてしまうかもしれない。あるいは、何とか形だけは成立させようと指導を急いでしまうこともあるかもしれない。こうした状態は、佐伯（2017）による発達の「ドーナツ論」にたよれば、その場での子どもの声に聴き入り、応答し、ケアしようとする面（「第一接面」）がおざなりとなっており、絵画技法をいかに指導するかという面（「第二接面」）ばかりに意識が向いている状態だと解することができる。他方で、子どもと向き合う「第一接面」に注力しようと思ったとしても、制作にかけられる時間にはどうしても限りがあるのが現実である。ある程度は効率的な指導をしなければならぬという難しさもある。

A 幼稚園では、2018年度のある時期に、上記のような課題に対して何か支援ができないかということが話題となっていた。すなわち、主に若手保育者が効率的・効果的に絵画技法やその指導法を学ぶことができ、子どもとのかかわりに注力できるような支援方法はないかということである。

そこで、「動画」による教材制作に試験的に取り組むこととなった。材料や動作を具体的に確認することができる「動画」があれば、短時間でも学びを深めることができるだろう。また、若手にあたる年代は日常的に「動画」に触れることが多く、日常の延長として無理なく学びに誘われることも期待される。結果として、余裕をもって子どもとかわれるようになることも期待される。こうした背景から、次のような「動画」教材を制作した。

## 5.2. 「早回し料理動画」を模した教材制作

「情報の凝縮」をなすための具体的な手法・形態に、料理レシピを「動画」形式で分かりやすく伝える「早回し料理動画」<sup>[9]</sup>というものがある。料理レシピを確認する際、従来であればレシピ本のテキストや限られた画像から調理の流れを想像するという、初心者には難しい思考プロセスを経る必要があったのだが、「早回し料理動画」の多くは1分程度の「動画」形式で、作業の様子を真上から映した見やすく分かりやすいものとなっている。スマートフォンでも視聴できる「3S」対応のものが基本であり、帰宅中の電車内で「今日の夕飯はどうしようか？」などと考えながら検索することもできる。また、「早回し料理動画」という呼称のとおり、何の作業をすればよいか理解するための要所以外は早回しとなるよう編集されている。単に情報が削除されるのとは違い、調理途中のプロセスも再生されるため、情報がぶつ切りに見えることはない。一連の作業の流れを見失うこともなく、かつ短時間で全体を把握することもでき、人気を博している<sup>[10]</sup>。

料理と絵画は無論別物であるが、制作のプロセスを分かりやすく表現できることは大きな利点だと考え、今回は「早回し料理動画」を模した「動画」教材を制作することにした。明石(2018)が記している制作手順や、実際に公開されている「早回し料理動画」を参考にしつつ、次のとおり作業を行った<sup>[11]</sup>。絵画制作の作業は一般的に中堅と言われる段階にあり、指導に慣れた保育者が行い、機材の準備や編集は筆者が行った。

### (1) 撮影

- ・ 撮影用のアームを用意し、作業しているところを真上から撮影できるようにする。絵画ということもあり、色をできるだけ鮮やかに映すために撮影用のLED照明を設置する。手軽さを重視し、撮影はスマートフォン(iPhone XS)で行う。(図1)
- ・ 絵画制作に必要な材料を準備し、保育者が一連の作業を行う(実際の制作と同様の方法で行う)。その際、カメラにはそのプロセスに必要な物しか映らないよう気をつける。扱う物が変わる場面では、撮影を一度止め、机の上を整理してから再開をする。
- ・ 「サイレンス状態」への対応のため、音声収録はしない(正確に言えば、編集で無音とするため撮影時は何の音が鳴っていても気にしない)。



図1 撮影環境

### (2) 編集と共有

- ・ スマートフォンで撮影したビデオをPCに

取り込み、編集ソフト(Adobe Premiere Pro)で編集をする。「早回し料理動画」の基本パターンにならない、作業の要所以外は早回しとする。プロセスを追う必要もないと判断された部分はカットする。1つの「動画」が1分程度の尺に収まるようにする。電車内などで視聴する可能性があることも考慮し、無音とする。テロップはシンプルなものとし、長い説明や細かい記述はしない。(図2)

- ・完成した「動画」をYouTubeに「限定公開」としてアップロードする。
- ・あるブログを「クラシル」などのサイトに見立て、アップロードした「動画」と制作方法を補足するテキスト(レシピ)による1つの記事を作成する。13種の記事を作成し、一覧にする。(図3)。



図2「動画」の一場面

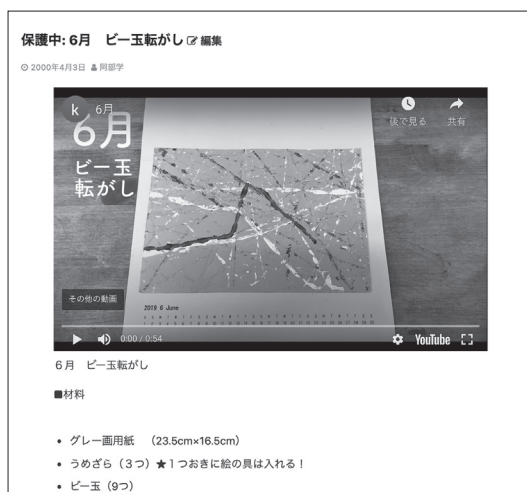


図3 仮想のレシピサイト

### (3) 活用

本教材は、2019年度に実際に活用された。2019年度の年中クラス担任2名は、制作にもかかわった中堅保育者と、新任の保育者であった。新任保育者からは、事前の視聴により制作方法を適切に理解できたり、制作場面のイメージをもつことができたりしたという声が聞かれた。中堅保育者からは、総じて例年よりもスムーズに制作ができるようになったという声が聞かれた。きわめて限られた範囲での考察になるが、今回の「動画」に一定の効果はあったと思われる<sup>[12]</sup>。

## 6. 考察

限られた事例からではあるが、「動画」による保育者の力量形成支援のあり方について考察を試みよう。

### 6.1. 「動画」教材の成立

第一に、保育分野においても「動画」による教材が制作できることと、その「動画」による学びが成立しうることが示唆された。「動画」教材を制作しようと思うのであれば、今回「早回し料理動画」を参考にしたように、「動画」のいかなる特徴を生かすかを検討する必要はあるのだが、別の角度から言えば、「動画」の人を惹き付ける様々な要素や、新たに生まれてきたユニークな方法論を教材制作に生かすことが可能だということである。アイデア次第で、さらに多様で効果的な教材を制作することができるだろう。特に、何かを制作することが多い保育分野においては、様々な活用方法がありそうである。

さらに、「動画」制作の容易さも示唆された。本事例にて、それほど高価ではない機材で撮影・編集を行ったように、大手テレビ局ほどの設備がなくても「動画」をつくることはできる。また、すでに明石(2018)が「早回し料理動画」の制作手順をまとめていたように、「動画」に関する新しい方法論はすぐに形式化され共有される傾向にある。そうした情報を参考にすれば、各園

においても比較的容易に「動画」制作に取り組むことができよう。

なお、各園において制作を行うならば、広く流通させることを目的とした教材では扱いつらい、自園なりのユニークな内容を取り上げることが検討するのがよいと思われる。そうした教材は、パッケージ化された教材よりも、直接的に自園の保育に役立つものとなるはずである。また、その副産物として、教材制作のプロセスの中で自園の理念や文化が再帰的に理解されるようなこともあるかもしれない。

## 6.2. 「動画」による創造や省察の支援

第二に、保育者の力量形成支援における創造性や省察といった概念の捉え方について検討する余地があると思われる。

榎沢(2016)が「マニュアルによる保育は質の高い保育を生み出すことはできない」「マニュアルとしての知識や技術を多数覚え、場面に合わせてそれを使いこなせば保育が行えるわけではない」と言うように、保育研究においてマニュアルなるものは忌避される傾向にある。榎沢は、保育者はマニュアルに依存するのではなく、子どもと誠実に向き合い、自身の保育を省察し続けながら、「状況に応じた保育の仕方を考え出すことのできる創造性」を身につけていくことが重要だと言っている<sup>[13]</sup>。

今回の「動画」教材は、一見すると保育者の創造や省察の機会をうばうマニュアルのようなものに見えるかもしれない。たしかに、課業的な活動における指導法を効率的に学ぶという部分のみを取り上げれば、本教材は否定的な意味でのマニュアルと捉えられることになるだろう。

しかし、留意すべきは、本教材を制作するきっかけが、子どもとのかかわりを豊かなものにしてほしいという園の願いにあったことである。園は若手保育者に対してマニュアルのようなものを提供することにはなるのだが、決してそのとおりに保育を行ってほしいと思っているのではない。むしろ、この試みによって省察の余地を生み、最

終的に「状況に応じた保育の仕方を考え出すことのできる創造性」を発揮したり身につけたりしてほしいと強く願っているのである。すなわち今回の試みは、マニュアルを否定して創造や省察へ向かわせようとする試みではなく、マニュアルを活用しながら創造や省察へ向かわせようとする試みであったということになる。あるいは、マニュアルでアタマをいっぱいにするのを避けるために、あえてマニュアルに頼るという逆説的な試みであったとも言えよう<sup>[14]</sup>。

これまで、保育におけるマニュアルと創造性の関係は、上記のように二項対立的に語られることが多かったと思われる。一方で今回の事例から示唆されるのは、それらのより複雑な関係性である。どちらかを否定しどちらかの優位性を主張するのではなく、マニュアルを経由して創造性の発揮や省察へ向かわせるといった動的で止揚的な関係が生じることが示唆された。こうした発想を具体化する術が今後さらに生み出されていけば、従来のようにそれぞれの優劣を主張しながら保育者の力量形成を語ることに、大きな意味はなくなるかもしれない。

そして、そうした関係性を生むことを可能にした一因は、やはり「動画」にあったはずである。マニュアルでの学習に長い時間がとられるのであれば問題だが、「動画」で効果的・効率的に学習できるのであれば、すぐに子どもの方に意識を向けることができる。うまくいけば、「どのように指導したらよいのか?」と不安を抱える時間は減り、「あの子はどんな絵を描くかな?」と楽しい気持ちを抱く時間が増えることとなる。俯瞰的に言えば、創造性をうばうものと捉えられがちであったマニュアルが、テクノロジーの発展やメディア環境の変化によって、創造性を発揮させるためのものとしてリデザインされる可能性に拓かれたということなのかもしれない。今後、子どもの生活を豊かなものとするというねらいのもとで、新たなテクノロジーを合理的に使うということや、そこでの保育者とテクノロジーの関係性などが、さらに検討されていくことが期待される<sup>[15]</sup>。

なお、注意しなければならない点もある。本事例にそくして言えば、子どもとのやりとりを豊かなものにしてほしいという当初の願いを十分に共有することが重要となる。どのようなメッセージにも、誤配の可能性はある。いつか当初の願いが失われ、「全員がこの「動画」そのままにつくればよい」「このとおりつくれなければ失敗」といったように、本教材が従来的な意味でのマニュアルとして伝わってしまうことはありうる。現段階では妙案までを示すことはできないが、当初の意図が適切に伝わり続けるよう、運用の仕方がきわめて重要となることを確認しておきたい<sup>[16]</sup>。

### 6.3. 他の試みとの相違点

最後に、他の試みとの相違点について考えてみたい。

近年、保育者の力量形成を支援する試みとして報告されるものには、保育のエピソードを用いた話し合いによる園内研修(中坪 2018)、実践についての省察を促すためのビデオ・ツールの活用(佐伯ら 2018)、ドキュメンテーションの活用(大豆生田ら 2020)などがある。基本的にこれらは、保育が営まれた後に保育中の記憶や記録について検討することをおして、保育者らに深い省察を促そうとする試みである。

一方で本事例は、保育が営まれる前に何かしらの支援を行おうとするものであった。上記の諸事例も、広く捉えれば保育の前から試みが始まるものだと考えることもできるが、両者の違いを微細に捉えるならば、事前的な試みと事後的な試みという点に、大きな違いがあると言えるだろう。今後、事前という観点に着目した研究が重ねられ、保育者の力量形成支援の幅が広がられていくことが期待される。

さらに、一点付け加えたい。諸事例のような試みにおいて、保育者らには、対話することや協働することに対してある程度は積極的であることが求められるはずである。それに対して本事例での学びは、一人で、特に誰かと会話することなく営まれるものである。対比的に言えば、

消極的な営みだと言えるだろう。一般的に人は対話や協働に対して積極的であるべきとされるものであるが、一方で、そうした風潮に異を唱え、消極性なるものを否定的に捉えず、環境の側をデザインすることで問題と折り合いをつけることが重要だという主張もある(消極性研究会 2016)。保育という営みも、素材には積極性と相性がよいものであるのだと思われるが、あえて消極性という観点に注目することで、何か新しい価値を生み出すことができるかもしれない。

## 7. 今後へ向けて

本稿では、「動画」という新たなメディアを活用した保育者の力量形成支援の一事例について記述し、その可能性について広く考察した。本研究をとおして示唆されたように、テクノロジーの発展や私たちの生活スタイルの変化に応じて、学びというもののあり方も変わっていくのだと思われる。これからは、そうした現実をふまえながら、保育者の力量形成支援のあり方や、保育者とテクノロジーとの関係性などを探っていくことが重要となろう。まずは、各論で示した点について詳しく検討することが課題となる。

## 注

- [1] ネクタイの結び方をレクチャーする「動画」を YouTube に公開しているベン・ビューイの言葉を紹介したものである。
- [2] 呼称対象が一般的な意味での映像(動画)コンテンツであり、文脈上「動画」とも「映像」とも呼びづらい場合、本稿に限りそれらをビデオと呼ぶこととする。
- [3] 本稿では諸外国の議論を追うまでは至っていないが、Movie や Film と区別するために YouTube Video という語が使われる場合もあり、概観した限りでは類似した状況となっていることはうかがえる。
- [4] たとえば、通勤の電車内などの音を出せな

- い環境であっても、「サイレンス状態」に対応した「動画」であれば内容を理解することができるということであろう。
- [5] YouTubeなどの動画共有サービスには、再生速度を調整できるものもある。再生速度を速め、さらに短時間で「動画」を視聴しようとする者も少なくないと想像される。ビデオを視聴するという体験のあり方は、様々に変化してきている。
- [6] もちろん、インターネット上には明石(2018, 2020)が言うような「動画」以外のものもたくさんある。たとえば、「情報の凝縮」が支持されるからこそ、あえて編集をしない長尺のビデオを公開し、ニッチなニーズを満たそうとする試みも見られる。ここまで参照した内容は、あくまで1つの観点にもとづくものであることに留意する必要がある。
- [7] 詳しくは、佐賀(1997)を参照のこと。
- [8] 念の為に記せば、こうした課題はA幼稚園に特有のものではないと言える。そもそも、何かを初めて指導する場面では、誰でもある程度の難しさを感じるものであろう。
- [9] 明石(2018)が紹介する呼称に従っている。他にも「料理レシピ動画サービス」など様々な呼称がある。
- [10] 日本では、「クラシル」や「DELISH KITCHEN」などのサービスが有名である。サービスが広まっている状況については、たとえば次のページを参照のこと。<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000119.000019382.html> (2020年12月1日確認)
- [11] 予算や撮影場所などの都合により、現実のサービスと同じレベルの環境にはなっていないはずである。
- [12] ここで取り上げた保育者の声は、日常の会話で聞かれた話を筆者の判断でまとめたものである。今回は、実践的に事を進めることを第一としていたため、効果の検証を厳密に行うことはできていない。
- [13] 榎沢(2016)は、マニュアルについて「それらは保育を行う上である程度役に立つものである」とも言っており、マニュアルの存在を全否定している訳ではない。ただし、他の多くの論者と同じく、論考では創造性や省察についての検討が中心となっており、マニュアルのあり方についての検討はなされていない。
- [14] 本節では今回の教材のことを便宜上マニュアルと呼んでいるが、本来であれば、別の呼称を検討したり、従来の意味でのマニュアルとは異なるものとして強調したりすべきであろう。
- [15] 次のようにも考えられるだろうか。保育者によっては、対面の場で子どもとのかかわりに不安を感じ、その不安から逃れるために、教材研究に過剰に注力するということがありうるだろう。そちらに注力することで、自分は自分なりに創造性を発揮しようとしているのだと安心することができるのだと思われる。しかし、こうした状態はいわゆる自己欺瞞なのかもしれない。また、本来発揮してほしい創造性とは異なる部分に意識を向けているという意味で、言わば創造性の誤謬に陥っている状態だと指摘されるものかもしれない。このように考えると、本事例は、人間存在が本質的に陥ってしまう自己欺瞞や創造性の誤謬という課題を、テクノロジーによってよりよい方向へ軌道修正しようとする試み—テクノロジーをもって、ある面では創造性(保育者の思う創造性)を否定し、ある面では創造性(本来発揮してほしい創造性)を積極的に発揮させようとする試み—なのだ表現することもできよう。テクノロジーの有効活用のあり方や、保育者とテクノロジーとの新たな関係性の一端が理解される。
- [16] 東(2020)がかねてより指摘しているように、誤配や偶然性にも意義はあるはずだが、本稿ではそうした議論には踏み込まず、今後の課題としておきたい。



## 参考文献

- 明石ガクト (2018) 『動画 2.0』 幻冬舎
- 明石ガクト (2020) 『動画の世紀』 ニューズピックス
- 東浩紀 (2020) 『哲学の誤配』 ゲンロン
- 新垣理佳 (2008) 「自由保育と課業的な行いのかかわりについて—土粘土での制作活動を例にして—」 授業実践開発研究, 1, pp.51-58
- 榎沢良彦 (2016) 「保育者の専門性」, 日本保育学会編『保育学講座 4』 東京大学出版会, pp.7-25
- 大豆生田啓友, おおえだけいこ (2020) 『日本版ドキュメンテーションのすすめ』 小学館
- ケヴィン・アロッカ(小林啓倫訳) (2019) 『YouTubeの時代』 NTT 出版
- 佐伯胖編 (2017) 『「子どもがケアする世界」をケアする』 ミネルヴァ書房
- 佐伯胖, 刑部育子, 荻宿俊文 (2018) 『ビデオによるリフレクション入門』 東京大学出版会
- 佐賀啓男 (1997) 『「ミミ号の航海」の教材としての構造と意義について』 放送教育開発センター研究報告, 99, pp.8-25
- 消極性研究会 (2016) 『消極性デザイン宣言』 ビーエヌ・エヌ新社
- 中坪史典編 (2018) 『保育を語り合う「協働型」園内研修のすすめ』 中央法規
- 西森年寿 (2010) 「学びの文脈を作る」, 山内祐平編『デジタル教材の教育学』 東京大学出版会, pp.25-39
- 日本財団 (2020) 「18歳意識調査「第30回—読む・描く—」要約版」 [https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2020/10/wha\\_pro\\_eig\\_146.pdf](https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2020/10/wha_pro_eig_146.pdf) (2020年12月1日確認)
- 山内祐平編 (2010) 『デジタル教材の教育学』 東京大学出版会
- ロバート・キンセル, マーニー・ペイヴァン (渡会圭子訳) (2018) 『YouTube 革命』 文藝春秋